

# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 竹内正彦著 『源氏物語の顕現』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 沼尻, 利通, Numajiri, Toshimichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000167">https://doi.org/10.57529/0002000167</a>

〔書評〕

竹内正彦著

『源氏物語の顕現』

沼尻利通

竹内正彦氏による第二論文集『源氏物語の顕現』（以下、『顕現』）が出版された。竹内氏の第一論文集は『源氏物語発生史論』（以下、『発生史論』）である。ここでは源氏物語の明石一族を軸に論が展開されていた。『顕現』でも、明石一族の論文は「御湯殿の儀の明石君」「夢のあとの明石中宮」がおさめられる。この二編以外の十九編の論文は、夕顔や光源氏、柏木などを軸にし、それに付随した儀礼などを手掛かりに物語を読解したものである。

『顕現』は、「若きいろこのみの蹉跌」「仮構される聖代」「苦悩する巨人」「情念のゆくえ」「終わりゆく世界」の五部構成である。「若きいろこのみの蹉跌」には、『源氏物語』第一部の夕顔をめぐる四編、「仮構される聖代」は冷泉帝治世下の『源氏

物語』の第一部から第二部を軸にした四編、「苦悩する巨人」は『源氏物語』第二部の老いていく光源氏を軸にした四編、「情念のゆくえ」は『源氏物語』第二部の柏木・女三宮を軸にした四編に、夕霧の所作を論じた一編、「終わりゆく世界」は、『源氏物語』第二部と、第三部の「終わり」を軸にした四編。合計すると二十一編。それぞれ源氏物語の構成とも重なるように配列される。

竹内氏の研究方法は『発生史論』の序章「源氏物語発生史論序説」に、「文学はそれを読むものの中に顕ち現れてくる」と印象的に示される。竹内氏の論文では、「顕ち現れる」「顕現する」と説明することが多い。

書名の「源氏物語の顕現」は、それだけの意味では誤解を与えかねない。「顕現」は、姿を隠しているものが、具体的に現れること、などと辞書では説明される。この字義通りにとらえると、「源氏物語の顕現」はおかしい。源氏物語は姿を隠していない、新編日本古典文学全集などの本として、具体的な形として、既に現れているではないか、など揶揄されかねない。もちろんそんな意図で「顕現」は用いられてはいない。平安時代の歴史や伝承、習俗、信仰などを援用しつつ、源氏物語の表現から、読み取りうることを深く読解してみせる。その手法は、

さながらミルフィーユのように幾重にも層をなしているものを、一層一層ごとに丁寧にはがし、その隠された本質をうきほりにするかの如きものである。物語の表層から、その深層を究明する営為は、まさに「顕現」としてしか言いあらわせられなかったであろう。そうして竹内氏により「顕現」された源氏物語は、これまで我々が読んできた源氏物語とは、違った光景が広がっている。同じ源氏物語を読んでいるはずだが、竹内氏の読解は深く鋭く、啓発されることが多い。

しかし、一部のところで、考察を密にすべきだったところや首をかしげたくなるところもある。いくつか例をあげたい。

「柏木の文袋」「紙屋の人」を召す光源氏」の二編は、柏木の手紙を中心に論が展開されている。「柏木の文袋」では、女三宮からの返書や柏木の手紙が、文袋に一〇通ばかりおさめられている。竹内氏は、「女三宮の返書を文袋に入れて、昼夜を問わず首にかけて持ち続け、繰り返し読む柏木の姿が顕ち現れてくる」とする。それを女三宮に贈ることは、柏木は自身の魂を女三宮のもとに寄り添わせる行為であるとともに「女三宮がその文袋を首にかける姿までも柏木は夢想していたのではあるまいか」（三四一頁）と述べる。その読み取りは、なるほどと思う一方で、いささか飛躍があるようにも感じる。その理由は、

そもそも弁尼が文袋を取り出したさいに、「ささやかにおし巻き合はせたる反故どもの、微くさきを袋に縫ひ入れたる」とされ、その由来も、「この御文をとり集めて賜せたりしかば」（橋姫）⑤一六三頁、引用は新編全集」と、今際の際に柏木が自身の手元にある一〇通ばかりのものを、「とり集めて」、巻き取り小型化して袋に入れたとの記述がある。もし、柏木が竹内氏の言うように返書を文袋に入れて常に首にかけていたとするなら、「とり集めて」と表現するだろうか。もちろん、「この御文をとり集めて賜せたりしかば」は弁尼の証言であり、その実際を物語は語ることはない。柏木の文袋の製作の詳細は、物語は語らないのである。

「紙屋の人」を召す光源氏」では、「鈴虫」巻で女三宮の阿弥陀経の料紙のために、光源氏は紙屋の人（紙屋院の職人）を呼び出し、「ことに仰せ言賜ひて心ことにきよらに漉かせたまへる」、特別に命じて、紙を漉かせたという。竹内氏は、紙屋院が平安時代に「宿紙」（再生紙）の製作工房でもあったことに着目し、光源氏が入手した柏木の手紙は、紙屋院の職人によって再生紙となり、それを料紙として消息経（故人の手紙を漉き直して写経する）にしたことを読み取る。すなわち、女三宮の手にする経の料紙は、柏木の恋文の再生紙であり、いわば鎮魂

になる。なるほどと思うと同時に、はたして「ことに仰せ言賜ひて心ことにきよらに漉かせたまへる」からそこまで読み取れるのか、疑問が残る。他人の手に渡ればスキャンダルになるはずの柏木の恋文を、紙屋院の職人に渡すのか、「心ことにきよらに漉かせ」た紙は、ここでは再生紙ではなく新しく作られた紙ではないか、などなど。

紙屋院や宿紙、消息経について丹念に歴史学の成果をもとに述べられているが、宿紙や紙屋院は、上島有氏による研究（中世の宿紙について）、「立命館文学」第五〇九号 一九八八年 一二月、「再び中世の宿紙について」『花園史学』第一五号 一九九四年一月）があり、再生紙とは言えど平安時代のもものは墨色が薄く、ほとんど白紙と変わらないという指摘は生かすべきだった。また、もし光源氏が紙屋院に依頼した料紙が消息経に用いられるとしたら、それが「阿弥陀経」であったことの意味も考えるべきで、消息経の嚆矢とされる『三代実録』の藤原多美子による清和天皇供養では法華経、『狭衣物語』の消息経は涅槃経。阿弥陀経は分量が少なく、いかにも女三宮向けの小経である。その経典を選び取った理由も考察してほしかった。この二編の論文に端的にあらわれているように、竹内氏の物語の読解方法は、物語の「隙間」を埋めていくところに特徴が

ある。平安時代の時代背景をふまえつつ、想像力を駆使して、物語の語られない文脈を補完するのである。この方法は、例えばW・イーザーの「空所」を思い起こさせる。イーザーは、文学作品には語られていない「空所」があり、それを読者が埋めていくプロセスを重視し、いわゆる読者論を展開していった（「テクストと読者の相互作用」『行為としての読書』岩波書店 一九九八年）。竹内氏の物語の「隙間」を埋めていく研究方法は、この方法とも重なり合う。「文学はそれを読むものの中に顕ち現れてくる」は、文学研究の方法論としては、読者論の範疇に入るだろう。竹内氏の研究方法は、折口信夫、高崎正秀、小林茂美、林田孝和と受け継がれてきた民俗学的方法の系統に位置づけられていくのであろうが、しかし先師の追従ではなくして、竹内氏なりの方法で、発展深化させている。その方法は、文学の基本である「読む」という営為によって生み出されている。『源氏物語』を徹底的かつ精密に読み込むことよってのみ、「空所」を見つけることができる。作品を深く読み込むこと——これが竹内氏の研究方法の基盤である。

竹内氏の論文は、緻密な構成とドラマチックな筆致により「読ませる」ものである。読後感は爽快である。ただし、いささか筆が立ちすぎるくらいがある。科学的な論文というよりも、文

学的な論文という印象を受ける。しかし、その内実は、平安時代の社会や民俗などを視座にイれた、あくまで論理的な論文である。科学と文学が融合したものと評すべきである。この論文集を読んで、改めて『源氏物語』を読みたくくなった。

(A5判上製、五三〇頁、武蔵野書院、二〇二二年十二月、  
定価一〇〇〇〇円＋税)